No. 7（2012. 10）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

第７号

FDニュース

● 目　次 ●

〔１〕本年度の活動方針
〔２〕FD 推進委員会の活動報告
　　１　FD 公開研究会（2011年度）の報告
　　２　2012年度前期の授業公開を終えて
〔３〕学科 FD の取り組み
　　食物栄養学科、食生活学科
〔４〕シリーズ授業
〔５〕編集後記

本年度の活動方針

FD 推進委員長　渡邊　完児

我が国は少子高齢化が一層加速化するとともに経済や科学技術などがグローバル化し、社会構造の流動化がすすんで将来の予測が困難な時代に入ってきていることが指摘されています。このような時代にあって、これから社会で活躍すべき若者や学生の自己研鑽に対する態度には大きな課題が残されています。このような若者や学生の行動が危惧され、2012年３月に中央教育審議会大学分科会では、「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」と題した審議会のまとめが報告されました。このなかで、授業時間にとどまらず授業のための事前の準備や事後の展開などの主体的な学びに要する時間を含め、総学習時間が諸外国に比べて不足している実態が指摘されました。大学の責務としては学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした学士課程教育への質的転換が急務であることが示されました。このようななか、本学では既に「教育目標実現に向け、自立した学生を社会に送りだすため、主体性・論理性・実行力を培う女子教育」を高めるための教育推進宣言が出されました。

FD 推進委員会はこの“自立した学生を社会に送りだすため、主体性・論理性・実行力”を発揮させるための授業づくりをはじめ学生との対話により、学生は何を求めているかという双方向からの FD を推進させるべく、2012年度では以下に示す活動計画を立案しました。今や FD 活動は全教職員及び学生で取り組むべき流れになってきています。そういう意味でも、今年度の FD 活動は学生の積極的参加を促し、学生と教職員が一体となって取り組む新たな出発点とも言えます。皆様のご理解とご協力を宜しくお願い申しあげます。

	小委員会名	活動内容
FD推進委員会	授業改善・改革委員会	授業公開により授業の進め方を研究し、学生が主体的に学習に取り組むことができる能力を育成することを課題とする。
	学生・教職員 FD 委員会	学生が「積極的に予習・復習に取り組めるための授業の工夫」等について学生と教職員との座談会を実施する。
	FD 講演委員会	学内外の講師による講演会や研究会を開催し、教職員の FD 活動への共通理解を得る。今年度は、「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会との共同事業として３回の勉強会を予定している。
	FD ニュース編集委員会	学科 FD 活動や FD 推進委員会の活動状況などをニュースに掲載する。

D02528_ＦＤニュース7号.indd　1　　2012/09/19　18:03:18

FD 推進委員会の活動報告

1　FD 公開研究会（2011年度）の報告

2011年度の FD 研究会は2012年２月22日（水）に神戸大学大学院人間発達環境学研究科長の朴木佳緒留教授を講師にお迎えし『大学におけるジェンダー平等の意義と課題』と題して行われました。朴木先生は前神戸大学男女共同参画推進室長、「成人女性の学習と男女共同参画社会」をはじめ著作多数、またジェンダー学の第一人者として多くの講演活動をされています。本研究会ではジェンダーの定義から始まり、「現代日本のジェンダー問題」、「ジェンダーの視点」、「男女平等教育とは？」、「女性研究者支援」の４点についてお話いただきました。「現代日本のジェンダー問題」では、労働の場で女性雇用者の半分以上が非正規、女性管理職が少数、男女の賃金格差は先進国中最大、生活に必要だが賃金が支払われない仕事（Unpaid work）が女性に偏在している、男女の教育格差がなお存在しているなどをお話しいただきました。「ジェンダーの視点」では男性は周囲から働く意欲を高めるメッセージを受けやすく、女性は意欲を低めるメッセージを受けやすいといったお話をしていただきました。「男女平等教育とは？」では幼稚園から大学までの学校段階別・職階別女性比率や大学専攻別男女構成比、学部・修士・博士課程の女性比率など豊富なデータを用いてジェンダーに不平等な教え方・学び方をしていないか、といった教育現場での問題を述べられました。「女性研究者支援」では日本政府による科学技術・学術における女性の活躍推進策、神戸大学の男女共同参画推進施策についてご説明いただきました。最後に「武庫川女子大学は政策を喚起し、自らモデルとなることができます。ともに前進していきましょう」と結ばれました。参加者は35名と少数でしたがアンケートでは「大変良かった・良かった」がおよそ９割を占め好評でした。参加者からは「学生にも聞いてほしい」、「教育の根本に触れることができた」などの感想をいただきました。

（2011年度 FD 推進委員　大井史江）

2　2012年度前期の授業公開を終えて

本学で「授業公開」をスタートさせて３年目を迎えました。2012年度前期の「授業公開」のコマ数と実人数は概ねこれまで同様の傾向でありましたが、今年度におきましては参観者の数が減少している印象がもたれました。

本「授業公開」に際しましては参観者からは「授業公開アンケート」を、授業担当者からは「授業担当者アンケート」にコメントを記入して提出していただいています。今回の「授業公開」の「授業担当者アンケート」では、共通して“参観者はいませんでした。おそらく授業やその準備等自分の仕事が忙しいのでしょう”というコメントが目立ちました。また、“「授業公開」を宣言することによってほど良い緊張感があって良かった”、さらにあるコメントでは、“授業公開は期間を設ける必要がなく、随時公開するのがあたりまえである”という意見もありました。昨年度までの同様のアンケートでは、参観者側からは“授業を参観することで自分の授業展開の参考になった”という意見が多く、多くの教職員は「授業公開」の意義は十分にあると認識しているものと感じられました。

前期「授業公開」期間中に、「授業公開」に関する討論会を実施しました。教職員からは「授業公開」に対する課題や期待等の本音を語っていただき、今後の「授業公開」のあり方を考える上で大いに参考になりました。私は FD 推進委員会における「授業公開」の担当者として３年目になりますが、この間多くの教職員の意見を聞くことができ、FD ニュースにも原稿を書かせていただきました。率直に申しあげて、「授業公開」は全教員公開すべきと考えています。この考えに反論される教員は時代の流れに逆行していると言わざるを得ません。しかし、授業の展開によっては参観に来られても得るものがない場合もあるでしょう。また、逆に素晴らしい授業が展開でき、自信を持って他の教員にも伝えたい時もあると思うのです。「授業公開」は教員を評価するために設定しているものではありませんし、教員にストレスを加えてまで実施すべきものではありません。しかし、繰り返しますが大学教員たるもの自分の「授業」を参観されたくないという消極的な姿勢では、ハイスピードで取り組み中の、我が国の「大学教育改革」という荒波に押し流されてしまう懸念があります。

本学におけるこれからの「授業公開」については、これまでの FD 推進委員会や「授業公開」に関する討論会での議論を基に、後期に向けて何らかの方向性を示したいと考えています。今後とも教職員のご理解とご協力をどうぞ宜しくお願い申しあげます。

（FD 推進委員長　渡邊完児）

学科別公開授業数と担当者人数一覧

		共通	大日	大英	大教	大新健健	大心	大環	大食	大情	大築	大音	新薬	大康	短日	短英	短教	短人	短健	短食	短生	合計
2012前期	コマ数	3	1	2	9	30	23	12	51	48	0	0	35	22	3	0	0	0	14	13	10	276
	担当者数	2	1	1	1	13	2	2	17	9	0	0	19	10	2	0	0	0	5	5	1	90
	実人数	0	1	1	1	10	2	2	17	9	0	0	19	7	2	0	0	0	2	0	0	73

D02528_ＦＤニュース7号.indd　2　2012/09/19　18:03:19

学科 FD の取り組み

食物栄養学科
食生活学科　学科長　田代　操

生活環境学部食物栄養学科は、人々の健康に寄与するために、豊かな人間性に立脚して、生活習慣病予防、健康維持及び増進に有効な食生活への改善を指導するための能力を有し、食生活を通じて健康に貢献できる有為な女性を育成することを目的としており、管理栄養士養成機関でもあります。また、短期大学部食生活学科は、食生活を食物科学、栄養科学、健康科学を中心として多方面から捉え、健康で豊かに暮らせる食生活を指導できる栄養士を養成することを目的としています。両学科は、文部科学省とともに厚生労働省の指導下にあり、食物栄養学科で管理栄養士国家試験受験資格を得るには82単位、食生活学科で栄養士の資格を得るには50単位の教科が必修となっています。また1クラスの授業を受ける学生数はおおむね40名以内と決められ、講義については１単位15時間、実験・実習については１単位45時間の実施を厳密に求められます。

このような状況下で食物栄養学科200名５クラス、食生活学科160名４クラスの授業を良質なものにするには、個々の教員の授業力アップと教員間の授業内容に関する調整・連携が必須となっています。授業改善をめざしては、すでに全学的に授業評価のアンケート調査や授業の事例紹介による研究集会、さらに授業参観などが行われています。食物栄養学科・食生活学科においても学科 FD 委員会が2011年度より立ち上げられ、本委員会主導のもと、学科全教員の授業を互いに自由に参観学習し個々の授業力アップにつなげていこうとの目標下、まず学科全教授の授業公開が行われています。一方授業内容の調整・連携については、学科教育委員会が主導的に取り組み、関連教科群の内容調整と連携を進めています。

ところで、学科 FD 活動はいかほど授業改善に寄与しているのでしょうか。また授業内容の調整・連携は授業の質を上げるのに本当に効果を発揮しているのでしょうか。問答無用、当然有益であると断言するのは簡単です。しかしこの辺りについては、活動結果を評価する仕組みがはっきりしていないこともあり、実際は極めて曖昧と言えるでしょう。先に述べたように食物栄養学科、食生活学科は、授業クラス数が多く同一教科を複数教員で担当することが多い。また通常、教科は関連する複数の教科でグループ化されています。したがって、授業法改善、成績評価基準、科目間内容調整や連携などについての話し合いは必須です。学科 FD がこの流れを押し進めていることは間違いの無いところであり、その成果は緩やかではあっても教員全体に浸透していくでしょう。しかしながら評価システムが明確でないこともあり、個々のレベルでは、FD 活動の重要性や成果をそれほど評価しないという立場をとることもあり得るのではないかと思われます。

食物栄養学科・食生活学科において、学生のニーズに応えるとともに必要十分な知識を教授するには、FD は欠かせないものです。したがって、その進展には評価システムを構築し FD の成果を明確に示すとともに個々の教員の自発的取り組みが重要と考えられます。そのためにも関連教科群を担当する教員が自発的にミーティンググループを結成し、FD 活動を進めて行くようになることが今後の学科 FD の課題です。

2012年度　FD 推進委員会メンバー一覧

No.	役　職	所　属	氏　名	No.	役　職	所　属	氏　名
1	委 員 長	健康	渡邊　完児	11	委　　員	建築	田﨑　祐生
2	副委員長	日文	西山　明美	12	委　　員	音楽	松本佳久子
3	委　　員	日文	管　　宗次	13	委　　員	薬学	西川　淳一
4	委　　員	英文	山根　明敏	14	委　　員	共通	木村麻衣子
5	委　　員	教育	和田垣　究	15	委　　員	教務部	齊藤　文夫
6	委　　員	心福	大岡　由佳	16	委　　員	研究活性支援課	菅　栄太郎
7	委　　員	健康	田中新治郎	17	委　　員	教務部	宗光　　猛
8	委　　員	環境	北村　薫子	18	委　　員	教務課	玉田　健二
9	委　　員	食物	澤田小百合	19	委　　員	指導課	山田　雅子
10	委　　員	情報	肥後有紀子				

D02528_ＦＤニュース7号.indd　3　2012/09/19　18:03:19

シリーズ 授業

「教員として喜びを感じる瞬間」

共通教育部　講師　西尾亜希子

2001年、私は長い学生生活を終えると同時に大阪女学院短期大学で非常勤講師として働き始めた。慣れない中で一喜一憂することも多かったが、若さと時間的なゆとりがあったせいか、今のように滋養強壮剤に頼らなくても十分元気だった。それに何よりも、学生と「同性」で「年齢が近い」という私の中での「安心感」が、学生との距離を縮め、授業の進行を円滑にしてくれた。しかし、学生の母親世代に突入した今、あの「安心感」はもうない。

幸か不幸か、授業中、学生が眠そうにしているか、目を輝かせて聴いているか、難しい顔をしつつも真剣に考えているのか等、学生の反応をよく見られるようになった。学生が眠そうにしている場合にはクラス全員を対象に３択問題を出したり、眠そうにしている学生を中心に縦列全員または横列全員に簡単な質問をしたりしている。質問する際には不自然でない程度に「明るく」、学生の回答に対してコメントする場合には「まずは受容してから」発展させるようにしている。授業が盛り下がらないようにするための些細な工夫である。実際にそのような１ショットをきっかけにクラスの雰囲気が良くなることは多い。ただ、本当はクラスサイズに関係なく誰もが寝ない授業がしたい。

授業について反省することは多い。「今の授業は良かったなぁ、うまく行ったなぁ」と意気揚々として研究室に戻れることは各学期にほんの数回しかない。この記事の執筆を機に、そのような授業の場合、いつもの授業と何が違うのか考えてみた。違いは、⑴授業の準備を念入りにする余裕があった、⑵学生が積極的に質問してくれた、⑶論文等の執筆を通じて知識が豊富になっており、その知識を授業で活かせたという３つに絞られる。特に⑶の場合が一番嬉しい。日頃、最も手強いと感じる反面、なぜか常に気になる「小難しそうな顔つきの学生」が、目を輝かせてうなずいたり、一所懸命ノートを取ったりする姿を見ることができるからである。めったにいないタイプの学生が、めったに見せない姿を見せる。そのことに手ごたえを感じるのだと思う。研究をすることによって知識をインプットし、授業でその知識をアウトプットすることの大切さを痛感する瞬間である。

編集後記

本当におもしろければ視聴率は上がるのだと、テレビ番組の視聴率リサーチを見ていると思う。FD推進委員を仰せつかって、FDニュースの編集担当を承り、考えこんだ。７月４日には、第１回勉強会に田口真奈准教授を招いて話題提供として30分の講義があった。正直いって、これまで大学講義の自己改革・意識改革・講義内容や講義方法の基本的点検などといったことの、高名な専門学者からのレクチャーは山ほど受けたが、心から感心するものはひとつもなかった。今回は違った。軽い興奮と深い反省、なにかもどかしい心中の葛藤があった。そうか、学生とともに毎回こんな時間が持てるように、ということか、と。鈍い頭にも気付く。では、どうやって、と発問したら、それが講義ですと切り返された。つくづくのみこみの悪いことである。どうぞ、是非とも、お目通しくださいませ、おもしろければ読んでいただけると祈念しております。（編集委員 SS）

【FD ニュース編集委員会】西山明美、管　宗次、木村麻衣子、玉田健二

D02528_ＦＤニュース7号.indd　4　2012/09/19　18:03:21